
聖杯戦争 - 導かれし英霊達 -

にきにき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖杯戦争 - 導かれし英霊達 -

【Nコード】

N1699BA

【作者名】

にきにき

【あらすじ】

かつて、冬木の地で行われし聖杯戦争

それは、聖杯の破壊という形で決着が付き、聖杯は完全に消滅。

2度と行われる事は無いと、思われていた。

しかし、冬木の地より遙か離れた別の地、別の世界にも聖杯はありそこでは、冬木の聖杯戦争とは少し違う理により始まるうとして
いる。

*この作品は聖杯戦争を複数の別の作品のキャラ達が行う物語です。
こいつたのが嫌い、という方は見ない事をお勧めします。

プロローグ

聖杯 それは、どんな願いでも叶える事が出来るという
神秘の結晶。

それを手に入れる為、7人の魔術師がマスターとなり7体のサーヴ
アントを召喚し、
それを使役し最後の1人になるまで戦い続ける。

英霊 それは、過去に偉業をなした存在。人々から崇め
られ、称えられ
英雄とされた者達。もしくは、自身の為に行動した結果、人々に
称えられた存在。
だが、今回行われる聖杯戦争は違いが大きい、何故なら過去だけで
は無い、
こことは違う、他のどこかから呼ばれ、そして、始まる。

そして、この度、新たな聖杯戦争の幕が上がる。

夕暮れの街、人が少しずつ居なくなっていく中に、3人の人影があ
る。

「は、今日は楽しかったな」

3人の内、1人は男で、その男が2人に言う

「そうだね、また行きたいね」

「ああ、中々面白かったな」

2人の女性は、頷くとそれぞれ答えた。

「でも、早く帰らなとまずいな。この辺りって確か最近通り魔が出るって言ってたからな」

「安心しろ、その時は私が守ってやるぞ一夏」

一夏と呼ばれた男は苦笑しながら

「ありがとなラウラ。でも、男としてそれは気が引けるんだよな」

「でも実際、ラウラの方が一夏よりも強いよね？」

「うっ、それを言うなよシャル・・・」

シャルと呼ばれた少女の言葉に一夏は落ち込んだ。ラウラはそれを聞き、

頷いている。3人はシャルこと、シャルロットがプールの無料券を手に入れて、

それが3人分だったので、一夏とラウラを誘い、3人で遊んできた帰りだ。

唯、一夏が言ったように3人が居る辺りは最近、通り魔が出没し、死者は出ていないのだが、怪我をしたり意識不明になった人間が何人も出ている。

ISを所持しており、訓練も受けている3人であれば大抵の相手に、やられる事は

無いだろうが、それでも用心に越した事は無く、早めに帰ろうとしていた。

暗くなってきた事によって人気の無くなった、公園近くを歩いていると

「うっふふ。次の獲物、みつけた」
「え？」

どこからか声が聞こえてきた。辺りを3人が周囲を見渡すと公園の木の上に小柄な人影を見付けた。その人影は木の上から跳ぶと、地面に着地した。

降りて来たのは、白色の髪を腰まで伸ばし、ゴスロリファッションの少女だった。

そして、一夏達を見ていると、行き成り迫って来た。

それに最初に反応したのはラウラだ。ラウラは一夏達の前に出ると、手刀を繰り出すが

相手はそれを簡単に避けると、蹴りを腹に入れた。

「がつ、……………」
「っ！ ラウラ……………」

一夏は何が起こったか、すぐには理解出来なかったが、ラウラが吹っ飛ばされた事で、

ハッとし、倒れているラウラに駆け寄り意識を確認すると、

「つく、大丈夫だ、それよりも奴はかなり強いぞ……………」

「へえ、今のを喰らって意識があるなんて、中々やるじゃない。

今まで襲った連中って、全員弱くて死んだり反応しなくなったりで退屈だったから、もう少し遊べそうかな？」

今まで襲った連中、というのを聞きシャルロットが

「もしかして、最近出てる通り魔って……………」

「っ、そんな、こんな子が？」

一夏は信じられない、と思ったが訓練を受けているラウラの攻撃をかわし、

一撃でここまでのダメージを負わせるのは、少なくとも一般人には不可能だ。

そう考えた一夏は、自分の腕に装着されたガントレットを見てから、

「シャル、ラウラを頼む」

そう言い、シャルロットにラウラを任せると、襲って来た少女に向かって

駆け出すと同時に

「こい白式！」

一夏がそう言うのと、体の周りが光りIS『白式』を装備した状態になった。

流石に武装を出す訳にはいかなかったので、一夏はそのまま抑え込もうとした。

それを見ていたシャルロットもラウラも、そして一夏もそれで決着が

付いたと思った。・・・だが、その考えはすぐに打ち崩された。

何故なら少女は

生身であるにも関わらず、それをかわしている。そして、再び蹴りを放ってきた。

一夏は咄嗟に両手で防ぐが、そのまま、後ろに押されてしまう。

「なっ、嘘だろ？ISと生身で戦えるなんて・・・」

今、目の前で起こった事に驚愕したのは、一夏だけで無く、後ろに居る2人も同じ様だ。

「へえ、驚いた。あんたISが使えるんだ。・・・なら、もう少し本気出しても死なないよね？」

そう言うと、少女は地面を蹴ると、先程よりも速い蹴りを放つて来た。

それは、威力も上がっていて、一夏は防戦一方の状態だ。なんとか反撃しようにも相手には隙が無く、中々攻める切っ掛けが見付けられないでいると、少女の動きが突如止まった。

「あれ？動けない？」

そこには、痛みで顔を顰めているラウラと、それを支えるシャルロットがいる。

2人ともISを装備しており、ラウラは右手を少女の方に向けていた。

「ハアハア、どうだ。停止結界の威力は、これで貴様は動けまい。

一夏っ、今の内に取り押さえる！」

「ああ、うおおおおーっ」

シュヴァルツエア・レーゲンのAICによって、動きを止められた少女に向かって

一夏は、両手で押さえ込んだ。今度こそ終わった・・・

3人は安堵仕掛けたが

「あっはは、驚いた。私を押さえ込むなんて・・・でも、ザンネン」
そう言い、笑みを浮かべると、少女の全身が突然、葉っぱになり
一夏の手を
すり抜けて行った。

「え？」

「なっ！」

「うそ！？」

目の前で起こった事に、今までの驚きが大した事が無い程の驚き
を受けた。

そして、その葉っぱは公園の前に集まると、再び少女の姿になる
と、一夏達に向かって

「あははっ、私が普通の人間だったらヤバかったけど、サーヴァン
トにはそんなの、時間稼ぎにもならないよ」

3人は少女の言った、サーヴァントの意味は分からなかったが、
1つだけ

分かった事がある。それは、自分達は普通では無い敵と対峙して
いる、という事だ。

自分達が今、行える最善の策とは何か、その答えに最も早く辿り
着いたのは
ラウラだ。

（私達がここから離脱するのに最適なのは、誰かが囮となりその隙
に2人が逃げる事だ。

停止結界を使えば数秒だが奴を止められる。その隙に一夏のイグニ

ツシヨンブーストで………)

ラウラがそう考えていると

「俺が足止めをするから、その際に2人は逃げろ」

一夏は前に一歩踏み出して、2人にそう言った。

「なっ、馬鹿な事を言うな。お前がシャルロットを連れて逃げる。

私はこの怪我で素早くは動けない。だから………」

「駄目だ！ そんな事は出来ない。それに白式の速さなら後でも逃げ切れる、だから………」

一夏がラウラにそう告げていると、

「ねえ、盛り上がってるところ悪いけど、誰も逃がすつもりは無いからっ」

そう言い迫って来た。

一夏は、雪片式型を持ち上段から振り下ろしたが少女は右側に回避し蹴りを

放とうとしたが、そこを雪羅のエネルギー爪で攻撃したが、姿が消えた。

と思ったら一夏の上に跳んでおり、今度は刺の付いた蔓が襲って来た。

その攻撃を諸に受けてしまい白式のシールドエネルギーは

どんどんと減っていつている。それどころかシールドで防いでいるのにも関わらず、

一夏自身も傷を負っている。

「さて、それじゃあ、そろそろ留めを差しちゃおうかな。バイバイ、それなりに楽しかったわよ」

そう言い、蔓を数本纏めると、1本の大きな蔓となり一夏に向か
って

放たれた。エネルギーも残り僅か、体勢的にも回避は不可能だ、

3人は誰もが

一夏の死を感じた。

(俺は死ぬのか、ラウラをシャルを誰も守れずに・・・嫌だ、俺は
決めたんだ。皆を守るって、だからっ・・・)

その瞬間 一夏の前に凄まじい光が発せられた。それに、一夏
達はもちろん

少女の方も、その眩しさに目を瞑りかけた。そして、光が消える
と、そこに居たのは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699ba/>

聖杯戦争 - 導かれし英霊達 -

2012年1月4日10時56分発行